

Title	中岡省治名誉教授に聞く-大阪外国語大学の思い出-(1)
Author(s)	進藤, 修一; 菅, 真城
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 3 P.285-P.312
Issue Date	2010-03-11
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/3526">http://hdl.handle.net/11094/3526</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 中岡省治名誉教授に聞く —大阪外国語大学の思い出—(1)

進藤修一・菅真城  
SHINDO Shuichi and KAN Masaki

### Emeritus Professor NAKAOKA Shoji and His Memories of Osaka University of Foreign Studies (1)

Keywords : Osaka University of Foreign Studies, student life, a junior college, a campus dispute

キーワード : 大阪外国語大学, 学生生活, 短期大学部, 大学紛争

#### 解説

本稿は、大阪大学文書館設置準備室が実施している大阪大学の歴史に関する名誉教授へのインタビュービデオ撮影事業の記録である。大阪外国語大学名誉教授へのインタビューは、是永駿名誉教授（進藤修一・菅真城「是永駿名誉教授に聞く—大阪外国語大学の思い出—」『大阪大学世界言語研究センター論集』第1号、2009年）に続いて、中岡省治名誉教授が2人目である。

中岡名誉教授のインタビューは2回に渡って実施し、本稿は、2009年10月28日に大阪大学外国語学部長室で実施した第1回インタビューの記録である。インタビュアーは、進藤修一大阪大学大学院言語文化研究科准教授が務め、菅真城大阪大学文書館設置準備室講師が同席した。

中岡名誉教授は、1955（昭和30）年4月に大阪外国語大学イスパニア語学科に入学、1959年3月に同学科を卒業後、翌4月に大阪外国語大学短期大学部に奉職され、2002（平成14）年3月に大阪外国語大学を定年退職された。47年の長きに渡り、学生・教員として大阪外国語大学とともに歩まれた方である。

本稿では、まず、中岡名誉教授ご自身が外国語に興味を持つようになったきっかけから始まり、大阪外国語大学に入学した動機、学生時代の思い出、教えを受けたイスパニア語学科の先生方について回想している。これらは、学生の立場からの、1950年代の大阪外国語大学およびイスパニア語学科についての生き生きとした証言である。

次いで、教員として大阪外国語大学に奉職してからの回想に移る。中岡名誉教授は1959年に短期大学部助手に採用されるが、大阪外国語大学短期大学部は、1958年に設置されたばかりの国立で夜間の短期大学という日本の大学史でも希有な存在であり、その証

言は日本の大学史上の大きな意味を持つものである。短期大学部は1965年に外国語学部第二部(夜間)に改組される。本稿でも、改組のいきさつ、学部と第二部(夜間)の関係、カリキュラム編成の苦心等、当事者でしか知り得ない貴重な事柄が語られている。そして、最後に大学紛争の思い出が語られる。

なお、第2回インタビュー分については、本誌次号に掲載予定である。

## 資料

2009年10月28日

於 大阪大学外国語部長室  
(大阪府箕面市)

### 大阪外国語大学に入学

**進藤** 今日は大阪外国語大学名誉教授の中岡省治先生をお迎えいたしまして、旧外大のいろいろなことをお伺いしたいと思っております。

私も先生がお辞めになる直前の何年間か、かたちのうえばかりですが同僚としてご一緒させていただきまして、今日は久しぶりで元氣なお姿を拝見して大変うれしく思います。

**中岡** ありがとうございます。

**進藤** 私の個人的な思い出なのですが、先生はお覚えかどうか。すらりとドイツ語の共同研究室にやって来られて、「進藤さん、ドイツ語のこういうのについて教えてくれないか」というお姿が、いまでも頭のなかに残っております。語科を越えてスペイン語の先生がドイツ語の質問に来られるなんて、非常に外大らしいところだなと感心した覚えがございます。

在校生も自分たちの学校の歴史を知るということは非常に重要なことだと思いますので、先輩であり先生であった中岡先生にいろいろなお話を伺って、そこから彼らが自分たちの学校のいままで来た道を考える機会になればと思い、今日、このインタビューを企画させていただきました。中岡先生、どうぞよろしく願いいたします。

**中岡** ありがとうございます。いまお話になった進藤先生のおられた共同研究室へ伺ってお教えを受けたことを、私はいまでもよく覚えております。お話をいただきましたときに、「進藤先生」というお名前を拝見して、ああ、あの進藤先生だと思い出しました。

**進藤** ありがとうございます。

**中岡** ありがとうございます。

どのような話ができますかどうか、私は非常に心もとない思いでいっぱいしております。ただ私が昭和30年、1955年に大阪外国語大学イスパニア語学科に学生として入学を許されましてから、4年間の学部の勉強を終えたその年に、短期大学部イスパニア語学科の助手に採用いただいて、それ以降平成14年3月の定年まで、この大阪外国語大学にお世話になるという幸運に恵まれましたこと、人生の大半をこの大学で送らせていただいたこと

に、感謝の念でいっぱいしております。

ですから、何か思い起こすことがあれば、そしてそれが少しでも何かのお役に立てることであれば、お話をさせていただくのがいいのかなと思ひまして、お引き受けいたしました。本当にどのようなお話ができるか、ちょっと自信がありませんけれども、精一杯やらせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

**進藤** よろしくお願ひいたします。

それでは先生、先ほども申し上げましたけれども、やはり本学の学生の大先輩として、昔、先生がどういうごきっかけでイスパニア語学科へ進学されようとなされたのか、そして進学された後、どのような大学生活を送られたのかというようなことを、思い出に残っていることなどを取り混ぜながらお話しいただけたらと思います。

**中岡** わかりました。

では、まず初めに、いまの先生のお言葉を受けまして、少しその点をお話しさせていただきたいと思ひます。

子供のころ、まだ戦争前だったと思ひますが、紅茶に缶入りの甘いコンデンスミルクを入れたのを、ときどき飲んだ覚えがあるんです。それが日ごろ食べているものとは一味違った、舌にまとわりつくようなおいしい味がしたわけですね。それが後になって、どうやら外国製の練乳らしいということを知りまして、あんなおいしいものができる国はどこかと思ひたことがあるんです。

また、当時はよその家に行きますと、特にしゃれたお宅では、玄関の壁とかに、あるいは応接間などに通してもらいますと、いわゆる泰西名画のプリントものがかけてあって、先生方も何度も見かけられたと思ひますが、湖があって建物があるというようなステレオタイプのプリントものだったと思ひますけれども、子供心にも、これはどこかよその国で、とてもきれいなところだな、という印象を受けたことを覚えています。

こんな幼児の体験があつて、大きくなったら一度外国に行つてみたいなと思ひたことも、後の勉強の何か1つのきっかけになっているのではないかと思ひます。

小学校3年生の夏の暑いときに戦争が終わりました。妹と弟がいたのに私だけ母にラジオの前に正座をさせられまして、同じように正座した母のそばで、無条件降伏を受諾する旨の天皇陛下の玉音放送を聞きました。天皇陛下のお声は小さくて、言葉も何を言っておられるのかさっぱりわからなかったんですね。しかし母は「戦争は終わった。日本は負けた」と言ひて泣いていました。私はその様子を見ていて怖くなりまして、僕らは皆、首を切られて殺されるのか、というようなことを母にたずねたことを覚えています。そうしましたら、母が怖い顔をして「そんなことはない」と言ひたのを、いまでも非常にはっきりと覚えています。

ものの本を読みますと、当時は戦争に負けたら、日本人は皆、捕虜にされて、アメリカに連れて行かれて強制労働をさせられるんだ、というようなことがまことしやかに伝えられていたようです。

それで思い出すことなんですが、新型爆弾が広島に落ちたということで、非常に気味の

悪い雲が、このあたりにまでやってきていましたね。そのときは空の色が非常に気味の悪い、暗い色に変わっていたことも子供心に覚えています。

中学校では、学校からよく映画に連れて行ってもらって、その1回にオルコットの『若草物語』というのがあって、カラー映画でもあったためでしょうか、アメリカの日常の家庭生活の一こま一こまが、まるでパラダイスのように見えたわけですね。こんなことで、なんとはなく大人になったら外国へ、あるいは外国と関係のある仕事に就いて、外国に行ってみたいなと思うようになりました。

それにまた、中学校で仲のいい友人の兄さんが、当時、この大阪外国語大学の英語学科におられたんです。その友人は、兄さんが自慢でした。それで、ときどき家に連れて行ってくれたのですが、そのときには兄さんの勉強部屋にも入れてくれたんです。机の上にいる英語以外の辞書が置いてあったので、なんかこう取り出して、そんなことをしてはいけなんでしょうけれども、触ってみたりパラパラとめくってみたりしました。その兄さんは非常に小柄な人でしたが、私は偉い人だと思ってあこがれの目で見ていたという覚えがあります。

そんなわけで、なんとか外国語を勉強してみたいと思ひまして、大阪外国語大学イスパニア語学科を受験しましたら、幸いなことに入学させてもらえたのですが、それ以後、先ほども申しましたように、人生の大半をこのようなかたちで大阪外国語大学でお世話になるとは、本当に思ってもみなかったことです。

**進藤** やはり幼少のころのさまざまな個人的な経験というものが、外国へのあこがれであったということですね。そういうあこがれが結構大事だとは思いますが、それが外大に進んでみようかというような先生のご動機だったと考えてもよろしいのでしょうか。

**中岡** ひょっとしたら、コンデンスミルクの味なんていう些細なことからの出発かもしれませんね。子供のときのたわいのないものへの興味なのでしょうが、そんなことも1つの動機になっているのかもわかりませんね。

**菅** 語科をイスパニア語にされたのは、どういったところからなんでしょうか。

**中岡** いや、なんか英語にもあこがれていたんです。しかし何とはなしに英語学科というのは非常に難しい語学科であるということが、われわれ受験生のあいだで言われておりました。英語の2、3行横に「イスパニア語」というのがあったんですね。そのときは、まだイスパニア語がスペイン語だということもはっきり知らなかったと思います。ですから、こちらのほうであれば、ひょっとしたら倍率が低いかなと思って、そんないい加減なことで受験したのではないかなと私は思うんです。

**進藤** 人生、往々にしてそういう偶然が将来に大きく作用をすると思いますが。いま現在の私たちから見ると、それは非常に幸運な偶然だったといえるかも知れませんね。中岡先生が後々にスペイン語で教鞭を執られることにならなかったかもしれないという意味では、非常に偶然な幸運かなと思います。

## 大阪外国語大学学生時代

**進藤** では引き続き、先生の大阪外国語大学の学生時代について、いろいろと語っていただきたいと思います。

**中岡** わかりました。

学生時代ですが、大阪外国語大学イスパニア語学科に入学できたのは、昭和30年、高等学校からすぐに入れていただきました。当時の日本は、復興いまだ成らずといったようなところも残っていましたが、皆が将来に向かって希望を持って生活できるというような、そういう雰囲気の時に入っていたと思うんですね。

日本で当時イスパニア語専攻を持っている大学は、東京外国語大学と大阪外国語大学の2大学と、もしかしたら私が間違っているかもしれませんが、天理大学にもイスパニア語の専攻があったと思います。

当時、大阪外国語大学は、調べましたら1学年学生総定員310人になっていました。大阪外国語大学には隔年募集の語学科もありましたし、入学定員も非常に少なく、それぞれ、英語学科が80人、中国語学科が50人、フランス語学科とイスパニア語学科が30人、ドイツ語学科とロシア語学科は25人でした。蒙古語学科、アラビア語学科、ビルマ語学科のように、定員は15人で隔年募集のところもあって、われわれが入学した昭和30年はビルマ語学科とアラビア語学科は学生募集をしない年に当たっていたようですね。

このようにコンパクトな大学だったので、半年ぐらいうると他の語学科の人ともいろいろ友達になったり、顔見知りになったりして、イスパニア語の仲間とはまた違う非常に面白い話もできるようになりました。とてもコンパクトな大学であったという、その点はよかったですね。いろいろな人と知り合いになれた、友達ができました。

**進藤** キャンパスもコンパクトだったと伺っていますが。

**中岡** 空き地はほとんどなかった(笑)。入ったところしかなかったですね。横に池があって、その周りに申し訳程度に地面というような感じの空間があった、というだけでしたね。ただし外側に狭い運動場がありました。

**進藤** なるほど。かえってそういうところだと、よく友達とも会うというか、交流の場が出来上がるのかなと思って、いまお話を伺っておりました。

**中岡** おっしゃるとおりです。では、次に行かせていただきます。当時、国公立大学の入試は1期校と2期校に分かれていました。旧帝大系の大学をはじめとする総合大学は1期校に、いわゆる旧専門学校系の新制大学は2期校でした。受験生は少なくとも国公立大学を2回受験できたわけですが、そんなところから2期校の大阪外国語大学は、いつも志願者の倍率が非常に高い大学になっていたんですね。

われわれが受験した年も、発表された倍率は、イスパニア語学科では15倍か16倍ぐらいだったと思います。これは困ったなと思って実際に受験場に行きましたら、あちこちにちらほらと空席ができていたんですね。すでに希望の1期校に通った人で受けに来ていない人もあったようで、空席がぼつぼつとできていて、これからという私は、そのような空席を見て、ほっとした気分になったのを覚えています。後で聞きますと、だいたい例年

3割程度の欠試者が出ているということで、少しでも倍率が下がってくれてよかったなど、後からは思うのですけれども。

それはともかくとして、こうしてイスパニア語学科に入学したのが、われわれ30名だったわけです。そして授業が始まり、少しずつ同級生のことがわかり始めてきますと、なかには、まだ俺はどこそこの法学部に行きたかったとか、経済学部に行きたかったという人がやはりいるんですね。受からなかったので、今年1年はこのイスパニア語学科に籍を置いて受験勉強をするんだ、というようなことを2人か3人ぐらいの人が言っていたと思います。

しかし少し時間が経ちますと、こういった人の姿は消えてなくなっていました。やはり、そうすべきでしょうね。二股をかけるのはやめて、本当に受験勉強に集中して、経済学部なら経済学部、法学部なら法学部に行ったほうがいいですね。

同級生のなかには英語が非常に堪能で、すでにバタ臭い英語を話す人もおりました。休学していて復学してきた、外大のことなら何でも知っているというような顔をしている人とか、病氣療養の後に、あらためてイスパニア語学科を受験して入ってきた兄貴みたいな人とか、多士済々で、高校を出て何も知らずにぼつんと入れてもらったような私には、皆がとても大きな存在に見えて圧倒されるような感じでした。

この兄貴みたいな人は、ある日教室で、授業が始まる前に、われわれにオルテガ死去のことを教えてくれたんですね。しかし、この「オルテガ」という学者のことを私は全然知りませんでしたので、ぼかんとしていただけでした。そうするとこの人は、ちょうどその時間担当のアルバレス先生が来られたときに、「オルテガ死去とのニュースを新聞で読みました。先生、この人について何か話をしてください」と言ったんです。やっぱり勉強されてきた人なんです。そのように先生に言われたのは覚えているんですが、アルバレス先生が、このスペイン人の哲学者について何を話されたのかというのは、私は全然覚えていないんです。

ですから、新入生の知識の差というのは、そんなふうにもいろいろで、同級生の間でも大きく違っていただろうと思います。私なんかは何も知らなかったと思うんですね、本当に何も知らなかった。

少し慣れるまでは、このようなカルチャーショックがいろいろとありましたけれども、特に年上の同級生の知識や経験談は驚くばかりでした。他学科でも事情は同じだったろうと思いますけれども、このオルテガと言っていた同級生には、その後もずっと、「何々さん」と話しかけても呼び捨てにはできなかったですね。そんな人もいました。

なお、以下では、広く一般的に言う場合には、「スペイン」、「スペイン人」、「スペイン語」を使わせていただきます。

ところで、当時の日本は、先ほども申しましたように戦争の後遺症が残ってしまっていて、大阪外国語大学も大阪市天王寺区上本町8丁目アメリカ軍の爆撃を受けて、同窓会名簿によりますと「書庫を除き学舎等の大部分を消失」となっておりますが、そういうことで、昭和21年2月1日からは一時的に高槻の工兵隊跡地に移って授業をしたようです。そし

てその後、前期は高槻で、後期は上本町8丁目だと、それぞれに2つのキャンパスに分かれて授業がおこなわれたとありました。

われわれ前期課程の時間割は、月・水・金の午前中2コマが専攻語学の授業、火・木・土が一般教養科目の授業、そして後期になりますと前期とは逆で、火・木・土の午前の2コマが専攻語学の授業ということになっていたと思います。ですから1週間に5コマかあるいは6コマ、必ず専攻語学の授業があって、それが4年まで続いたわけですね。

高槻の学舎は暫定的なキャンパスだと聞いていましたけれども、工兵隊の跡地ということで、かつての兵舎である木造の堅牢な建物が教室で、一部には銃架というんですか、銃を立て掛けるための台座もまだ残っていました。冬はとても寒く、オーバーを着てマフラーを付けたままで授業を受けたこととか、もちろんストーブなどは教室には望むべくもなかったし、運動場は公立の中学校と共用だったとか、いろいろありました。

国立大学の当時の授業料は年間6,000円で、日本育英会の奨学金が月2,000円でした。それだけではわかりませんが、たとえば昼に食堂でよくどんぶり飯とおでんを食べたのですが、それが20円か25円ぐらいではなかったかなと思います。おでんがいくつかあって、それで20円か25円、あんパン1つが5円ぐらいだったでしょうね。だから2,000円というのは、そのあたりから計算いただいたらと思うんです。昔のことで、大阪市内に市電が走っていたときです、その市電に乗って梅田から上本町に通いますと、1カ月、学生定期で300円でした。ですから2,000円というのは、そういうことを加味して考えてみると、最低限の生活をなんとか維持するのにかなりの助けになった、ということではないでしょうか。

また自治会の何かの交渉でもあったんでしょうか、高槻では1年に1回か2回ぐらい、学長の平澤俊夫先生が大教室に出てこられて、学生の代表と議論をされたこともあります。1学年の入学者が定員310人だったと申しましたが、少ない学生数の大学ですから、その日に来たり来なかったりしている者もあるわけで、せいぜい100人か150人ぐらいの学生を前に、学長さんがいろいろとお話をなさったり、また学生の代表と議論をなさったということでしたね。

このような学長さんと学生の直接のふれあいとでも言うのでしょうか、その「ふれあい」という表現ははなはだ疑問ですけども、それができたのは、小さな、こじんまりした大学であるからこそ可能だったのかもわかりませんね。ああ、あの方が学長さんかと思って、はるか遠くからお姿を拝見していましたけれども、学長さんは歌舞伎の役者を思わせるような、威風堂々とされた非常に恰幅のいい方でした。

**進藤** 先生、高槻校舎のことなのですが、前期が高槻、後期が上本町というのは、1年間のうち前期・後期ではなく？

**中岡** そうではなくて、1年次、2年次は高槻で、ということです。

**進藤** 前期・後期課程ですね。

**中岡** そうなんです。そして3年、4年は上本町で、ということでしたね。

**進藤** 高槻の学舎というのは、どのへんにあったか覚えておられますか。



**中岡** はい、阪急の高槻を京都に向かって右側に出まして、ずっと道を南へ南へ下って、非常に大きな国道がありまして、そこを渡って少し行くと、右手に当時は高山右近を祀った教会がありましたね。

**進藤** 先生、いまでもあります。

**中岡** そうですね。神社もありましたね。そこをまだ少し下って左に曲がって行けば、もう工兵隊跡地というところになりました。

**進藤** ああ、そうですね。おそらく現在は高槻城址公園か何かになっているのではないかと思います。

**中岡** ああ、そうですね。

**進藤** 右側に現代劇場とか、いろいろそういう公共の施設がございまして、左側に行かれるのだったら、たぶんいまは公園とか、もう廃止されましたけれども大阪府立の高校がそのあたりに。

**中岡** 島上高校というのがありましたね。

**進藤** あのへんは確か統廃合になっているように思います。(注:大阪府立島上高等学校は、2003年に高槻南高等学校との統合により、募集停止)

よくわかりました。では先生、引き続きお願いします。

## 教えを受けた先生方

**中岡** では、教えを受けた先生方にお話を移させていただきます。

教えを受けた先生方ですが、昭和30年組が入学したときのイスパニア語学科には、学科主任として教授の佐藤久平先生、助教授として國澤慶一先生、助手の山田善郎先生、それから外国人教員としてホセ・ルイス・アルバレス先生がおられました。非常勤で天理大学から武内恒次先生も出講されていまして、われわれも教えを受けました。

英語や中国語のような大きな語学科と違いまして、学生数が1学年30人前後の語学科での教授陣というのでしょうか、別の言い方をすれば教官定員というのでしょうか、それはこのような構成ですね、つまり教授、助教授、そして講師・助手ですか、講師・助手というのはどちらか1人ということになるようですね。そういうコンパクトな一つの講座に、あるいはそれに近いかたちになっていたようです。

## 佐藤久平先生

**中岡** 専攻の授業は、1年次では講義が1つと、次に文法、それから文法・作文、文法・講読、会話というかたちで合計5科目があったのではないかと思います。これらは全部が実習科目で必修科目で、学科主任の佐藤久平先生が「イスパニア語音声学」という講義をなさっていました。

もう少しだけ簡単にお話ししておきますと、この講義イスパニア語音声学はイスパニア語学を専門とされていた佐藤久平先生が、戦前に2年間スペインに留学されたときに、イスパニア語音声学の世界的権威であったトマス・ナバロ・トマスというスペイン人の学者

の下で研鑽されたイスパニア語音声学の理論を、その著書の『イスパニア語の発音の手引書』、これは1918年に初版が出ているのではないかと思います、その内容に言及しつつ、学生用に易しく解説されたもので、1年間のノート講義でした。しかし軟口蓋音などと言われても、最初は何のことかわからないのですね、そうすると佐藤先生が、こういう口の形をいろいろなさって、それでああそうか、ということになりました。

佐藤先生は外国語学校時代からの学科主任でおられて、新制大学におけるイスパニア語学科の主任としても、大学にふさわしい研究教育体制を模索しておられたようですね。ある日のことですが、このイスパニア語音声学の授業中に、われわれのうちの誰かが先生に、「先生がいま講義しておられる『イスパニア語音声学』が、イスパニア語の学習そのものにどのような効果があるのですか」とたずねたんです。しかし佐藤先生は、その質問に直接には答えられなかったと思います。私の記憶では直接にはそれに答えられず、確かこのように言われたのではないかと思います。「われわれは、この大学でイスパニア学を修めることになるんだ」と。そして「もし、君たちの誰かがイスパニア語をしゃべることだけを勉強しようと思って、いまここにいるのなら、早く辞めて会話学校に行きなさい」と言われました。

その佐藤先生の意味される場所が何ぞやということなんですが、それはまさしく佐藤先生が言われた「イスパニア学」とは何ぞやということなんです。われわれはイスパニア語そのものの学習に一生懸命で、単語を引いて毎日勉強しているわけですが、この命題をめぐって、つまりイスパニア学という命題をめぐって、単語の意味を調べながらも食堂や街の喫茶店などでも、よくわれわれの間で議論をしたことを覚えています。これは当時の外大にとって、またわれわれ学生が自分のアイデンティティを確立するためにも、自分自身に突き付けられたテーマであったのでしょうね。

**進藤** 教員も、そして学生も卒業論文なり修士論文なり博士論文なりで自分の専門というものを探求していくわけですが、その専門を基に、では外大というなかで何をするのかということところは、いまでもまだ解決されていない問題で、例えば言語学が専門だ、文学が専門だ、というアイデンティティが強い人間もいますが、いまの主任の先生のお言葉など、僕は非常によく理解できるのですが、われわれがやっているのは語圏学ではないかという人間もいますね。つまりドイツ語圏学あるいはスペイン語圏学といったふうに、総合的な研究というものがあるがわれわれ外大に課せられた使命であるという方もおられて、先生がまだお若いころからそういう議論をされていたというのは、いま非常に興味深く伺いました。

## 國澤慶一先生

**中岡** ありがとうございます。次に行きましょう。

佐藤久平先生は昭和32年に満65歳で定年退官されたんですが、退官されたその年の6月には病を得て急逝されています。そして、その佐藤久平先生のご退官にしたがって、國澤慶一先生がイスパニア語学科の主任に就任されました。われわれは國澤先生に、もちろ

ん1年生のときには入門文法の教えを受けたのですが、テキストは國澤先生が編纂されて出版されたばかりの教科書『イスパニア語の初歩』(1955)でした。國澤先生は、これを出版されたばかりでしたから、「校正をしっかりとつもりなんだけれども誤植があるかもしれない。もし気が付いたら教えてほしい」と、一番最初におっしゃったと思うんです。私は「校正」とか「誤植」とかいう言葉も、ここで初めて聞くことになりました。

先生の授業は、そのテキストのなかの文の解釈に始まって、それが終わると、今度はそれまでに解釈した文に近い内容の日本語を先生が口頭で言われるわけです。それを即座にわれわれはイスパニア語にして答えなければいけない、という形式が中心になっていたと思います。これは教科書に出ている基本的な単語を使って言えば非常に簡単に言えるのですが、そういうレベルに至るまでには時間も必要で、やはり相当の実力がつかなければ、そうは簡単には答えられないと思うんですね。ですから先生からのヒント、指摘があるまでは、やさしく言うことがなかなか言えなくて、半年ぐらいは本当にもどかしい感じの日々でした。

ですから、やはり基本的な表現の形式とか、あるいは基本的な文構造というのは、きちんと最初から無条件に覚えていかなければいけないということなんでしょうね。教科書に出ている基本的な動詞を使えば簡単に言えるのに、それがなかなか思いつかずに立ち往生ばかりしていたと思います。

國澤先生は昭和11年にスペインに留学されていますが、その年に市民戦争が起っていますので、それで先生はスペインを出て、パリに難を避けて研究を続けられたようです。その後、ポルトガルとチリでも研究を続行されて、13年に帰国されています。

この間のお話をときどき伺うことがあったのですが、おそらく國澤先生は、この昭和11年から13年のスペイン留学のときではなく、後にスペインに行かれたときに闘牛の光景を写されてきていて、その8ミリをわれわれはよく授業中にも見せていただきました。しかし8ミリといいますが、何か白黒が動いているだけで、どれが牛やら闘牛士やらわからない、先生だけがわかっておられる。だから「これ、これ、これ」と言われるのですが、われわれには何も見えない(笑)。しかし國澤先生はそれがご自慢で、何か催し事があると、写してきた闘牛の8ミリを見せるからと、よく見せていただきましたね。

國澤先生はイスパニア語だけではなく、ポルトガル語をも教えられていました。もちろんご承知のように姉妹語ですから、われわれもいろいろな意味でポルトガル語の勉強はしておかなければいけなかったのですが、イスパニア語学科の学生は、あまり予習せずともわかるところがあるので、われわれはずばらばかりして、よく國澤先生に「その答えで勉強してこなかったことがよくわかるね」なんて言われましたね(笑)。

國澤先生は大学全体の就職幹旋部長もされていました。これは國澤先生が半ば奉仕のお仕事というかたちでなさっていたようで、これは後で知ったことですが、非常にご苦勞なことであったと思われます。大学全体の学生の就職をもみておられたのでした。

## 山田義郎先生

中岡 イスパニア語学科には、後に大学第7代学長になられた山田義郎先生が、当時、先ほど申しましたように、助手としておられました、1年生では、日本で発行されている当時ではごく少ない教科書の1つ、これは高橋正武先生、日本で初めての本格的なスペイン語辞典の著者でもあります、その高橋先生の『スペイン語文法読本』(1953)で文法・講読の授業を受けました。

高橋先生には後にお会いすることができるようになったので、このお話をここでご紹介するのですが、この読本は昭和28年出版で、白水社が1,000部刷ったとお話でした。そして、「これで10年間あった」とおっしゃるので、その理由をおたずねしたら、「それはそうですよ、大阪と東京しか使わないもん」とのお答えでした(笑)。

進藤 なるほど。

中岡 「そうすると本屋さん」と申しますと、「いやいや、それは本屋の1つの意気込みでしてね」というふうに言っておられましたね。だから、利益とかは関係なしの出版社の心意気だった、と高橋先生は言われたと思うんですね。教科書を1,000部刷ったら10年間あった時代だったのです。

そういう状況からもご推察いただけるように参考書も何もなかったもので、山田先生は一番お若かったので、1課が終わると特に文法上の事項について皆が次々と質問するんですね。それに山田先生は一つずつ答えていってくださったという授業でした。みんな一生懸命に質問していました。なぜ、あんなにみんなが質問したのかと思うんですが。

山田先生はわれわれが2年のとき、昭和31年ですがスペイン留学をされることになって、当時のスペイン留学、特に半年という長期にわたって出向かれるということで、みんなすごいと言っていました。先生の留学期間中は、神戸市外国語大学から、これも後の同大学の学長になられる林一郎先生が非常勤講師として出講されて、われわれはピカレスク小説をテキストとして授業を受けました。

林一郎先生もイスパニア語学科のご出身で、山田先生の1年先輩で、京都大学でイタリア語を修められて神戸市外国語大学においでになりました。ピカレスク小説というのは16・17世紀のスペイン語で書かれているものが多く、それを教材に2年生のわれわれにお教えいただいたんですが、これもまた難しいんですね。16世紀のスペイン語なので、またわからないことばかりです。そうしますと、またわれわれはさかんに質問するんですね。ですから林先生は後で、「あんなに質問ばかりするクラスは初めてだ」と言っておられたと、山田先生が帰られてから、われわれのクラスで言っておられました。それも楽しい思い出ですが、先生方もそんなふうにご学生のことをお話になっておられたんだと思います。その年の後半は、帰国されたばかりの山田先生の授業に戻りました。先生がわれわれにスペインのお話をされるときは、ぴかぴかしておられるような感じがしました。

山田先生には3年生と4年生で『ドン・キホーテ』の原典で講読の授業を受けました。またそれは現代語と違ってきますから、いろいろと疑問が出てきて、われわれの質問癖というものは全然変わっていなかったということでした。

ご承知でしょうか、山田先生は後年、昭和42年から46年まで、やはりこちら外大においてになった中国語学科の相浦杲先生と時を同じくしてと記憶しているんですが、NHKテレビのスペイン語講座を担当されて、日本でのスペイン語普及に大いに貢献されました。それがちょうど大学紛争の激しいときと重なったということで、いろいろ気を遣われたり、ご苦労があったということ、イスパニア語学科の研究室の1人としていろいろとお伺いしております。

### 角田理三郎先生

中岡 先ほど、初代の学科主任の先生を佐藤久平先生と申しましたが、その佐藤先生が退官なさって、その後任として、それまでジェットロにおられたと聞きましたが、角田理三郎先生が新しく教授陣に加われました。それはわれわれが後期に移ったとき、上本町8丁目に移った最初の年です。ですから、われわれは角田先生の一番最初の教え子ということになるわけですが、それまで先生は中南米諸国の在日公館やジェットロでスペイン語に関係したお仕事をなさっていたので、授業中でも先生の実体験からのスペイン語に関するお話は、また別のアングルからのお話でもあり、興味津々ということでありました。

中南米事情や政治経済関係の授業を担当されていましたが、メキシコ中央銀行の月報、これは『海外通商』という日本語になるかと思いますが、それを読み、それまでは習ったことのないような、今度は経済・政治関係のスペイン語が出てくるわけですね。「貿易」というのはスペイン語ではこう言うんだとか、たとえば「貸し借り」はこう、「バランスシート」はこうというようなことまで、1つ1つ教えられた覚えがあります。

角田先生の授業で印象に残っているのは、いまお話したようなことともう1つ、最初にディクテーションがあって、それがすむと、すぐさまわれわれに、そのテキストをもう一度スペイン語で読んで、今度はそれを日本語に訳せと言われるわけです。そのあいだは全然時間的余裕がありません。こちらは、きっちりと聞き取れなかった不完全なテキストで、いつも冷や汗ばかりかいていたことを覚えています。当時は、このような実習の授業で学生を絞るという授業の方式が、基本的な方針としてあったのではないかと思います。

角田先生はコーヒーの大好きな方で、われわれ6人、7人と、上六（上本町六丁目）の小さな、安いと言っただけいけません、あまり高くないアメリカ堂という喫茶店で、よくコーヒーとケーキをご馳走になりました。われわれは、「角田先生、コーヒーをご馳走してください」とは言いませんけれども、授業が終わってから研究室に訪ねて行くわけですね。先生もよくご承知で、「それじゃあ、コーヒー飲みに行こうか」と言われて、よくコーヒーを飲み連れて行ってもらいました。

私が助手にしてもらってからのことですが、留学生別科に来ていたメキシコ人の製紙技師が、「角田先生はメキシコ人みたいなスペイン語のしゃべり方をされる」と言っていましたね。つまり、われわれは、いわゆる佐藤先生をはじめとする先生方から、スペインのスペイン語を教わっていました。ですから、英語にもある音、歯間摩擦音 [θ] をきっちりと発音せよと教えられていたのです。しかしメキシコのスペイン語にはその音が

なくて、日本語の [s] に近い、同じものではありませんけれども、それに非常に近い [s] で発音するのですが、角田先生は、スペイン語をしゃべられるときには [s] にしておられたようでしたから、それもあって、先生のスペイン語はメキシコ人にとってみれば、自分の国のスペイン語みたいだという感じがしたのではないかと思うのです。

### 吉田秀太郎先生

**中岡** 吉田秀太郎先生はわれわれがイスパニア語学科で教えを受けた一番お若い先生で、先生のお名前は、昭和28年に一度新聞で読んで私は存じあげておりました。「吉田秀太郎氏が大阪外国語大学イスパニア語学科を卒業して、チリ大学に留学される」といった記事が写真入りで出て、当時、外国のことなどに興味を持ち始めていましたので本当によく覚えています。

吉田先生は昭和28年のご卒業と同時にチリ大学に留学されていますが、3年間の研鑽を経て、31年にチリ大学を卒業されて同じ年に帰国され、その翌年に大阪外国語大学の助手としてイスパニア語学科の教授陣の一員となられています。佐藤先生は「いま、チリ大学で勉強している皆さんの先輩がいるが、近々帰国することになっているので、イスパニア語学科を手伝ってもらおうと思っている」ということを、授業中におっしゃったことがあって、私は、ああ、吉田先生じゃないかなと思ったことがあるんです。

われわれが2年のとき、佐藤先生が病に倒れられて、その授業が吉田先生になりました。それ以降ずっと吉田先生にお教えを受けることになるのですが、先生は最初の授業で、黒板に19世紀スペインの詩人グスタボ・アドルフォ・ベッケルの詩1篇を書かれて、それを解説し朗読されました。その最初の授業のことを、いまでもはっきりと覚えています。おそらく、先生がチリから帰国されて、あまり時間が経っていないときだったのではないのでしょうか。先生を初めてお見かけしたときはオーバーを着ておられて、そこにまだチリが残っているようなしゃれた雰囲気を見せていました。そして、授業では、アンドレス・ベリヨ『カスティリヤ語文法』(1847)なる文法書を紹介して下さって、その文法書の序文を読んで、抄訳をつくって解説を付すというレポートが、まず最初にわれわれに課された問題でした。

しかし、その文法書は1度や2度読んだぐらいでは何が書いてあるのかさっぱりわからないですね。特に序文というのは難しいことを書きますから、また輪を掛けて難しく、何が書いてあるのかさっぱりわからなかったことを覚えています。しかし、その文法書は、構造主義的な文法理論を百年も先取りしたと評価されるような、学術的価値も非常に高い文献でして、それ以降は自分自身の参考書としても活用させていただいています。

### アルバレス先生

**中岡** もうお一人、外国人の先生としては、日本のスペイン語教育で不滅の足跡を残された方として、ホセ・ルイス・アルバレス先生がイスパニア語学科の専任教員としておられました。入学して最初の時間を待っていますと、相撲取りのような非常に大きな立派な体

軀の先生が、のしのごしと教室に入ってこられて、日本語で「私、アルバレスです。今日から皆さんにイスパニア語を教えます」と言われたんです。一番初めのことばはどんなに言われるのかな、イスパニア語というのはどんなことばかというのも、アルバレス先生から聞けるかなと思っていたのですが、日本語でおっしゃったのは何とはなしに意外でしたね。

先生は、初代の外国人教授のミゲル・ピサロ先生が昭和8年に辞職し帰国されたので、その後を受けて、昭和10年に、大阪外国語学校に外国人教師として、公式の名称ではこのように言うのですが、外国人教師として来日されました。そして先ほど申しましたが、時はスペイン市民戦争、日中戦争の勃発などで世界情勢も不穏な時代であって、スペインでの共和国政府の成立に伴い、先生は一時期、共和国代理公使として東京に移られたこともあったようです。

しかし、昭和18年からは研究・教育の世界に戻られて、21年以降、再び大阪外国語大学専任教員として、平成2年に定年を迎えられるまで、スペイン語の教育に精魂を傾けられていました。定年後も非常勤講師として授業を担当されて、歩行が不自由になられてからも車椅子で出講されていたんですね。先生のスペイン語教育にかけられた情熱はすごかったと思います。

ときどき先生には「何年日本においでですか」という質問があります。スペイン語で años [アニョス] というのは「年」なのですが、「アニョスで言うのはやめてくれ」と、スペイン語で「世紀」を意味する siglo [シグロ] で、英語で言う century ですが、「シグロで言ってくれ」とよくおっしゃっていました。日本で半世紀以上もの年月にわたってスペイン語を教えてこられたことが、先生の誇りでもあったと思うんです。

アルバレス先生のことをもう少しだけお話しておきますと、1年生のときの会話の授業で使ったテキストは、先生が駐留アメリカ軍の兵士にスペイン語を教えられたことがあって、そのときに払い下げられたスペイン語会話のテキストだったんですね。先生からは「この本を1年間皆さんに貸してあげるので丁寧に使うように」との注意があって、それが教科書になっていました。先輩もそうして使っていたものとみえまして、手垢や勉強の痕跡もついていました。それは確か『Spoken Spanish』といったと思いますけれども、もちろんのこと文法上の解説や文化に関する事項の説明は全部英語で、われわれはそれをまた英語の辞書を引いて読まなければいけないので、やはり英語は大切だなと、そういうかたちで英語の必要性というものを実感させてもらったことがあります。

アルバレス先生は早くから卒業論文の準備をせよと言われていて、3年生のときにはいまある資料が少ないからといって、授業が始まるたびに、しばしば最初のお話として、あなたの卒業論文は何にするんだ、どういうテーマにするんだ、それならこういう本があるからここへ行って借りてこい、といったことを常におっしゃっていました。外国からの書籍とか文献が手に入りにくかった時代ですから、アルバレス先生にとっては卒論の指導というのも、人には任せておけないような思いがあったのでしょうか。特にスペインから本を買うというのは、時間のかかる、非常に難しい時代でした。

## 短期大学部助手

**進藤** それでは先生、次に教員として、当時はまだ「教官」だったかと思いますが、大阪外大に奉職されたのちのお話を伺ってみたいです。

**中岡** はい、わかりました。

実は私がこの大学にイスパニア語学科の助手として採用していただいたのは、大学4年を卒業した、その年の4月になるのです。こういったかたちで採用いただいたというのは、非常にまれなケースではないかと周りの人にも言われました。うらやましいと言われたこともしばしばあります。

大学4年の夏休みが明けまして大学に行ったら、廊下に会社からの求人がひそやかに、イスパニア語学科指定として張り出してあったんです。われわれは入学は30名ですが、4年では20名ぐらいに減ってしまって30社か40社ぐらいからの求人ですから、そんなに広い門戸でもなかったわけです。

それで私は1つか2つ受けたのですが、すべてしてしまいまして、会社はやめようと、やはり勉強をしようと思いました。そこで学科主任の國澤先生のところに行って、当時のいわゆる1年間のマスターコース的なもの、それを「専攻科」と呼んでいたのですが、その専攻科の試験を受けさせていただきたいとお願いをしたわけです。黙って願書を出すというのもいけないかと思ひまして。

すると國澤先生は「これまで専攻科に学生を入れたことがないし、ほかの先生方と相談してみるから」とおっしゃいました。もちろんほかの先生方も、もし誰かが入れればその授業をも持たれることになるわけですから、やはり先生方とご相談をされる必要があったんでしょうね。しかし、どうも否定的な感じだったんです。そういうことは何かわかるんですね。それで、いけないのかなと思って、そのところは強く先生にも言わないで、ここがいけないのであればよその大学院を受けよう、そのための勉強も少ししようかなと思っていろいろ調べていましたら、そのうちに何となく気持ちも落ち着いてきました。

こうしていましたときに、卒業の3月になってからだったのですが、國澤先生から大学に来るようにと連絡をいただいて、何かと思って出向きましたら、「イスパニア語学科の先生方に相談して、先生方からも同意を得たのだが、君を短期大学部イスパニア語学科の助手に推薦したいと思うが、受けるかどうか」というおたずねだったのです。

私は最初、そのお話をいただいたとき、ことの重大さに思いつくこともできずに、それ以上、先生にいろいろとおたずねすることもよろしくないと思ったので、教務助手のような身分だろうと勝手に解釈して、「ありがたくお話をお受けします」と申し上げました。

そうしたら、後日、先生からは4月1日から研究室に出るようにと、それに加えて、先生は専攻科のこともいろいろとご心配いただいていたんでしょうね、「私が君に個人的にイスパニア語の指導をすることも考えているけれども、この点の詳細については、君が少し落ち着いてからにしよう」というお話をいただきました。それで4月になって辞令を頂戴したら、「大阪外国語大学短期大学部助手に採用」とあって、「えっ、これは気持ちを引き締めて臨まねば」と思ったことを覚えています。2年、3年した後でも、そんなこと



はまれだと言われまして、非常にうらやましいと皆さんから言われたことを覚えています。

私自身も、これは普通あることではないぞと思いましたけれども、まだ学生の身分だと自分は決めていましたので、学生服を着て研究室に行っていたんです。そうしたら國澤先生に「君はいい加減に背広を着てこんか」と言われまして、母に「先生が背広を着てこいと言われたので背広を買ってくれ」と(笑)、そして母に背広を買ってもらったことも覚えています。これが昭和34年4月でした。

そして、先ほども申しましたように、國澤先生からは、勉強のこと以外にも服装や生活面でいろいろと教えを受けたんですね。先生はたばこを吸われなかったのですが、ある日突然に「君はたばこを吸わないほうがいいな」と言われたことがあって、私は先生の前ではたばこが吸えなかったんです。

そのとき非常勤の先生として、ドミニコ会のスペイン人ドミンゴ神父さんがイスパニア語学科に来ておられました。ドミンゴ先生はたばこを吸われるときには、習慣として、1本だけを出して自分で火を点けるということは絶対にされないんです。こうたばこを出されて、封を大きく開けて、周りの人に勧められるんですね。それがスペイン人の習慣のようです。

そうしますと、國澤先生と私がいまして、ドミンゴ先生は非常によくたばこを吸われましたが、吸われる前に、まず國澤先生にも私にも勧められるわけですね。國澤先生は吸われない、私のところでいつもこうしてたばこを差し出される(笑)、國澤先生から「中岡はたばこを吸うな」と言われているということは何とはなしに知っておられるんでしょうね。だから私のところで、いつも「たばこだぞ」と言って、にやっと笑って勧められましたね(笑)。たばこについてはよくそういうかたちで、ドミンゴ神父さんから冗談を言われたことを覚えています。

助手の仕事は、教材をタイプライターで打ったり、試験問題をこしらえたり、図書館で先生方から指示された本を探したり、文献の有無を調べたりと、いまとは違った意味での仕事がたくさんあったと思いますね。謄写版を刷って、それを1枚1枚教材として重ねて、またこれをホチキスでとめて、というのも非常に大切な仕事でした。先生方は教材の準備に非常に多くの時間を使っておられたと思います。

ある日、編入試験があって、イスパニア語で受けるという人が出てきたので、その試験問題をタイプせよと言われて、イスパニア語の問題をタイプしました。私は何度も読み返して、それで先生方も見られたと思います。これでよしと思って出したんですね。そして返ってきた答案を見ると、打ち間違いをしている、冒頭の単語が間違っているんですね。定冠詞が女性形であるべきなのに、男性形になっていたのを発見して愕然とした覚えがあります。自分の教材での間違いは、しばしば打ち間違いをやりましたけれども、1回だけこのように編入試験の問題のタイプライターを打ち間違えたことがありました。

そのときに、先生のところへ行って「間違いました」と言うと、「君はほんやりしとるな」と言われたことを覚えていますけれども、それ以上のおとがめはありませんでした。受験した人は通ってくれたから本当にありがたかったです(笑)。

すでに述べたことですが、國澤先生からは基本的なスペイン語文法の文献を与えられて、1週間、2週間後までに調べておくようにと指示された部分について、詳しいご教示を次々といただいでいく、そういうかたちでいろいろと勉強をさせていただきました。だから先ほども申しましたように、専攻科のことは、國澤先生としてもやはり気にかけていただいていたんだろうと思います。ですから、こうしたご指導をいつも思い出してはありがたいことだったと感謝をしております。

ある日、國澤先生の教えを受けていたとき、先生は、「われわれは自分の専門研究分野を決めて切磋しないといけないのだが、この大学の性格としてなるべく幅広くスペイン語をわかるようにしておく必要もあるんだ。商業スペイン語もまた16世紀のスペイン語も、そんな気持ちでわれわれはこれまでやってきたんだ」と言われたことがあります。このお言葉を聞いてこれは神業だと思ったのですが、よく考えてみますと、外国語学校の時代から外大が背負ってきた宿命のようなものが見えてくるようにも思えます。いま考えてみますと、先人のご苦勞も大変だったのではないのでしょうか。

そして、昭和37年には森本久夫氏が、私と同じように短期大学部のイスパニア語学科の助手として入ってこられました。ですから、われわれ2人は助手で、短期大学部でいろいろ輪読会をしたり、ほかの勉強会をしたりしました。ただ学部では、原則的にですが、助手は授業を持ちませんし教授会にも出ませんね。しかし、外大の短期大学部の場合は特殊事情で助手が授業を持つことがあるかもしれない、だから教授会にも常に出席するようにというように指示されたと思います。ですから、半分は教務助手のようなかたちで、半分は教員のようなかたちという身分であったのかもしれませんが。そうした指示をも受けておりました。

**進藤** 学部での助手は授業も持たないし教授会にも出ないというのは、たしか教授会は教授、助教授だけが出席できて。

**中岡** たしか、一般の教授会に加えて、教授だけの教授会もあったと思います、それを厳密な意味での「教授会」だと理解しておりましたね。

**進藤** 私もそういう話を聞いたことがあって、昔は助講会という助手と講師の会があったと。教授会に出られないので別に会をつくってどうこうという話を、少し耳にしたことがあるのですが、まさにそういう事情だったわけなんですね。

**菅** 短期大学部の教授会のお話なんですけれども、助手でも出席しろということですが、それは何かのときの評決の権利とか投票権みたいなものまで、助手にも認められていたのでしょうか。それとも陪席するだけみたいなかたちなんのでしょうか。

**中岡** 意見は言えたのではないかと思います。司会者あるいは短期大学部の主事さんのお許しがあれば、意見は言えたと思います。ですから、おそらく表決権も与えられていたのではないのでしょうか。

**菅** わかりました。

## 短期大学部のこと

**進藤** では、引き続き短期大学部のお話をお願いいたします。

**中岡** 短期大学部のことに移らせていただきます。短期大学部イスパニア語学科の助手で若輩の私には、どのような経緯で、大阪外国語大学に短期大学部が設置されることになったのか、それは知る由もありません。

ただ、昭和37年の大学便覧によりますと、以下のように「大阪外国語大学短期大学部は、地元各界の熱心な要望により昭和33年3月31日夜間短大（英語・イスパニア語・中国語）として大阪外国語大学に併設されて発足した。本学は外国語を通じて国際的実務に従事するに必要な専門的教育を施すと共に、教養ある社会人の育成をも目的としている。昭和34年4月ドイツ語・フランス語・ロシア語の3語科が増設され、教授陣も充実して本年3月には第2回の卒業生を送り出した」とする説明がありました。ですから、こういったところからも設立の目的、経緯が明らかになるのではないかと思います。

そして何年かして側聞したところでは、短期大学部設置には、このような勤労学生に外国語学習の場を提供しようとする社会的な使命に加えて、大学の規模を拡充して、それによって特に学生定員や教官定員の増加を図ろうとする目的もあったようです。

学部で入学定員を30名とする語学科では、教員構成は教授、助教授、それから講師または助手、これが1つの語学科の教官定員であって、定員3名ということになっていたようです。この教員構成は、教授の先生が教授としてずっとおいでになると定年まで人事が動かないということが出てくるわけですね。これはどこの大学でもよくあることだと思います。

そこで短期大学部の設置で、学生定員30名、英語科では50名とする6語学科の設置が認められて、併せて教授、助教授、講師・助手の定員が新たに認められたとすると、これによって大学としての教官定員増が見込まれる、という考え方も大学当局にはあったのではないかということなのです。これは先生方から何度もお伺いした話です。

そういう大学としての1つの考え方というか、期待感といったものもあったのではないかと思います。当時、この短期大学部の6語学科のうちには、学部から移ってこられた先生が学科主任としておられるところと、外部から新任の先生が来られたところとがありました。イスパニア語学科では、学部の主任教授の國澤先生が、当初、何年かは学科主任を兼担されています。教授会も短期大学部の専任教員だけのこぢんまりとしたもので、先ほどもお話がありましたが、私のような助手の身分の者までが出席するようにとの命を受けました。

短期大学部の初代主事は中国語学科の主任教授の小林武三先生で、小柄で穏やかなお人柄の方でしたが、2週間に1回ぐらいの回数で会議があって、はるか遠くから拝聴していたのですが、発足したばかりの短期大学部のあるべき姿、将来構想を熱っぽく語っておられました。小林先生のお話では、あるときのことですが、いずれは短期大学部としての研究所を設置したいとおっしゃっていました。そのころ語学科別の研究室はなくて、短期大学部専任の教員が大きな部屋のあちらこちらに机を置いて、2年間ぐらいでしたか、共同

の研究室として使っておりました。イスパニア語学科には、昭和35年に山崎俊夫先生が、41年には出口厚實氏が着任されています。

短期大学部は修業年限が3年でした。この3年間で学部の前期課程の授業科目と、プラスアルファの授業を行うことが義務付けられていたと思います。しかし、こうした授業科目を1日2コマの枠のなかに組み込んで、3年まで支障なく履修してもらえるような時間割を編成するのは、やさしいことではなかったと思うんですね。ですから、それに私たち助手も少しばかり慣れてきますと、國澤先生から先生方のご都合を伺って次年度の時間割素案をつくれと命を受けたことがあります。森本さんと2人で、そういう作業もしました。

また、当時の日本はまだ土曜日が休みではなかったもので、やはりその他の曜日と同じように2コマの授業がありました。土曜日の夜の授業というのは、皆嫌うんですね。ですから、それは独身者がやれということで、私と、ときには吉田先生にもお願いして、最初の頃は吉田先生と私というかたちで土曜日の授業をやったことがあります。授業が終わってからは上六の安い寿司屋で遅い晩ご飯を食べながら、先生にチリに留学されていたときのお話を伺ったりしました。

そして國澤先生から始まって、学部の角田先生、山田先生、吉田先生、アルバレス先生が、少なくとも1週間に必ず1日、2コマの授業を担当されていました。ですから、短期大学部にだけ外部からおいでになるという先生は、あまりおられなかったのではないかと思います。短期大学部のイスパニア語学科では、専任の教員と学部の先生とが中心になって授業をおこなっていたということだったと思います。

短期大学部の学生諸君はいろいろな年齢の人がいて、まだ若輩の25歳ぐらいの私は何となく面はゆい思いをすることもありました。「何々君」と言ったと思ったら、それが40歳も50歳もの方であって、「これは失礼しました。何々さん」と改めたことがしばしばありました。

ですから、スペイン語は仕事の上で必要だという人、これがいわゆる勤労学生ですね。そして大学院での研究でスペイン語の文献を読む必要があるんだと言っておられたお医者さん、お医者さんの卵の方でしたか。また、昼間は関西大学か関西学院といった大学ではなかったかと思いますが、私立大学に通っていて、夜間にだけスペイン語の授業を受けに来ているんだという人もいて、短期大学部は学部の学生とは違った多様な学生諸君だったと思います。

こうした学生からなるこぢんまりとした短期大学部でしたが、第8回（昭和43年）をもって終わっていますね。

**進藤** 10年間もたなかった。「もたなかった」という表現はおかしいかもしれませんが、10年をたたずして第二部に改組するということですね。

**中岡** そういことです。

## 第二部（夜間部）のこと

**進藤** そうしましたら先生、第二部についてお話をお願いします。

**中岡** はい。まだ私も短期大学部に所属しておりまして、短期大学部助手という身分でいろいろ勉強をさせてもらう、仕事もさせてもらっていたというときで、私自身ははまだ短期大学部に籍があるという段階でした。

そして短期大学部を発展的に解消して、昭和40年4月に外国語学部第二部（夜間部）が設置されまして、イスパニア語学科では昭和45年3月に第1回卒業生17名を送り出しています。昭和40年入学ですから、45年卒業ですね。

これは先ほど申しましたように、3年間で修学期間とする従来の短期大学の学科課程を前期として、その上に2年間の後期課程を新たに加えるというかたちで、短期大学の6語学科を発展的に解消して成立したものでした。6語学科の入学定員220名、前期3年・後期2年の5年制であることを除けば、学科課程は第一部とほとんど同じで、卒業に必要な単位数もほぼ同じでした。

教授会も一本化されまして、第一部と第二部の専任教員によって、同じ1つの場で2つの学部の議題が審議されることになり、それまで「短期大学部」といえば、何とはなしに遠慮したような感じでいたわけですが、そういう気持ちはかなり払拭されたのではないかと思います。

もちろん、短期大学の各語学科の学科主任が第二部の学科主任に就任されて、短期大学の専任教員が二部専任教員にスライドして第二部の教員組織が構成されました。学生定員を70名とする英語学科以外の語学科の定員は30名で、教員スタッフも増員され、イスパニア語学科も完成年度では学生総定員150名の学科として、すでに昭和35年からおいでになった、イスパニア語学科の卒業生の山崎俊夫先生を学科主任として、三原幸久、出口厚實、伊藤太吾、堀内研二の5先生からなる教員組織となりました。

第一部イスパニア語学科は教官定員5名で入学定員50名ということでしたから、全体をプラスしますと、大学としては50プラス30名、これが1学年の学生定員で、教官定員が5名プラス5名プラス1名の外国人の先生、といった語学科構成になっていたと思います。ですから、ほかのドイツ語、フランス語、それから他に……。

**進藤** 中国語、ロシア語。

**中岡** 中国語は第一部を入れるとちょっと多かったですかね。しかし第二部に限りますと、中国語、ドイツ語、フランス語、それからロシア語、イスパニア語の5語学科は、30名の入学定員でしたから、教官定員は5名だったということでしょうね。

カリキュラムでは、第一部と第二部は内容的に差がなかったと思います。ただ時間割をつくる場合に、1週間で32コマのなかに50ほどの授業科目を配置できる第一部と、12コマしかない枠のなかに、ほぼ同数の科目を配置しなければいけない第二部とでは、事情が大きく違ってきました。こういった条件に縛られた第二部では時間割の編成が実に窮屈で、これは第二部専任教員の出講日数にも影響を及ぼすようなことになってきたわけです。

例えば、ある教員の担当コマ数を週5コマとしますと、その5コマ全部を学生の要望とか他の先生方の出講、外部からの先生方の出講との兼ね合いで、どうしても夜間の第2限目に、例えば1週間に5回置かなければいけないようなイレギュラーなことも出てきたわ

けです。

正論を言えば、「第二部専任なんだから、ノルマが5コマであれば、そのノルマの時間を果たすために週4日でも5日でも出講するのが当たり前じゃないか」という意見もあるかもしれませんが、できたら、もう少しお互いに考え合って、少し助け合ってというような気持ちも、もちろん生まれてきたわけですね。特にお年を召しておられる先生の場合などは、そのように1週間5日、夜間の第2限目ばかりを担当せざるを得ないというのは、ちょっと考え直したらいいのではないかという意見も出て、話し合いがもたれたようでした。何とかそういった点を是正できないかという声が上がってきたわけなんです。

こういうことを言っているのかどうかはわかりませんが、短期大学のころから学部の語学科の協力が得られているところと、それが十分でないところがあったようです。微妙な問題ですが、そういうことを聞いたことがあります。

イスパニア語学科では、専任の先生方は、先ほども申しましたように週1日は必ず夜間部にも出講されており、協力態勢は十分なものがありました。これは第二部になってからもそのまま続いていたのですが、一方では、短期大学部とか第二部の設置そのものに、もともと賛成ではなかった語学科もあったようなのです。こうしたもろもろの経過があつての短期大学部とか第二部という、新しい組織の設置ですから、そこには外部の者にはわからない各語学科の事情というものも関係していたのでしょうね。

いま申し上げたのは私自身も何となく聞いたり感じたりしたことでもあります。しかし、そんな雰囲気があるとすれば、それをも含めて全体を是正するために、特にフランス語学科とドイツ語学科の若手の先生方から、第一部と第二部の協力態勢の導入が学長先生に提案されたわけですね。そして、それが「通しノルマ」という方式のもとに、あるいはそれに近い授業担当の方式でもって具体化されて、各語学科で新たな原則にしたがい時間割が編成されるということになったのだと思います。

この通しノルマの方式を導入し、1部：2部／3：2の比率で教員の1部と2部での授業担当コマ数を決めて、これによって実際の授業時間割を作成する方式は、イスパニア語学科では、他学科に先駆けて比較的早くから取り入れていたように思います。

すでに申しましたでしょうか、教授、助教授の場合は1週間6コマ（12時間）の授業担当ノルマということになっていたようですから、通しノルマの方式にしたがい3コマを第一部で担当し、2コマを第二部で担当すれば、それでノルマ6コマを担当したことになる、ということですね。

しかし、例えば講師で、担当ノルマ数が4コマの場合をどうするかということですね。うまく割り切れない。助手も2コマとか1コマという場合にはどうするのかということが出てきました。しかしそのところは、第一部、第二部の時間割をきちんと編成するというのが大原則ですから、それを原則にして、あとは夜間の授業をどうしても2コマ持たざるを得ないのなら持って、昼間の授業を1コマにするとか、いろいろな調整はその都度、毎年やっていたのではないかと思います。ですから、そのことでイスパニア語学科で何か問題が起こったとか、あるいはわれわれのあいだで嫌なことになった、というようなことは

なかったと思いますね。

こういう協力態勢に入るのが少し遅れた語学科もあると思いますけれども、大学としてこの通しノルマによる授業担当の方式が適用されて、一部・二部の制度も落ち着き始めたのではないのでしょうか。

そして先ほども言いましたけれども、ここに至るまでには、大学の将来を考えて、時の学長金子先生に、第一部と第二部の協力態勢の必要性を具申した若手のフランス語とドイツ語の教官の思いから始まって、語学科内部でもいろいろな努力があったであろうことを、ここでもう一度思い起こしておきたいと思うんです。

もう少し補足させていただきますと、第二部の1日2コマの枠に第一部と同じ科目数を組み入れていくということは、事実上は困難であったので、ここでそれまで2単位であった実習を4単位にしたのではないだろうか、とおっしゃる先生方もおられます。そうすると、学生諸君は2単位であれば2科目取らなければいけないけれども、4単位にすると1科目の履修で終わられるということなんですね。このように第二部の時間割の窮屈さというものを、何らかのかたちで軽減する措置も取られていたと思います。

しかし、第二部の実習を4単位にしたら、やはり第一部もそれに倣わなければいけないということになるわけでしょうね。ですから第一部の実習も4単位になったように思いますが、そのあたりの正確なことはわかりません。ですから一応、そういうこともあったということだけ、ここで申し上げておきたいと思います。

そしてもう1つ、今度は週5日制になりますと、なおよけいに授業時間割が窮屈になるわけですね。

**進藤** そうですね。

**中岡** ですから週5日制になったのを機に、一部の授業科目で第一部と第二部相互履修制がおこなわれるようになったのではないかとおっしゃる方もあるんです。

それともう1つ、これは次の問題になるかと思いますが、移転に伴って、第二部の授業時間1校時を80分にしたんです。始まりを10分遅くしたんですね。ですが、いつの段階か、やはり大学の1校時で80分はないとの文部省からの指摘を受けて、本来の90分に戻したということもありましたね。

その次ですが、第二部の設置に関して問題が持ち上がってきました。つまり第二部移行に際して、そのときに短期大学部に在籍する学生を2年次と3年次、卒業する学生を4年次に受け入れてほしいという要望が在学生諸君から出たことでした。

しかし、この要望も、新設の大学の開設時には第1年次のみを置くという「国立学校設置法」のために実現しなかったのです。つまりその国立学校設置法というのは、「新しい学部設置は、初年度は第1課程が、第2年度は第2課程が…とする順年度方式によるべきであって、初年度に第4課程までが出来てしまうような設置形態はありえない」ということであったようです。

学生諸君は授業をボイコットして抗議の意思を示しました。この要望に同情的であったのは、先ほどからもいろいろとお話ししましたが第二部の若手の教員、助手もそこに入っ

ていたと思いますが、若手の教員でして、少なくとも文部省に事情を説明して在学生諸君の切なる願い、その実現の可能性がないものかどうかを文部省にたずねてほしいと、再三、教授会でお願いしたと思います。しかし、やはり残念なことに学長先生や主事先生には、この提案は容れられなかったようです。

引き続き勉学を希望していた短期大学部の学生にとっては、本当につらいことだったろうと思います。事態が落ち着いたときに、何人かの学生諸君が研究室にやってきてくれたんです。そのとき、たまたま私しか居合わせなかったのですが、彼らはこの問題について率直に自分たちの思いを語ってくれました。こちらとしては申し訳ないような気持ちばかりがして、本当に何もできなかつたことが残念で、静かに語る彼らのことばを聴いておりました。

聞くところでは、第二部に第4課程ができるまで待つて、中断していた勉強を再開した短期大学部の卒業生もいたようで、そういう熱心な学生の事例を見ますと、学生諸君の要望がなんとかならなかったのかなと思ってしまいます。しかし、国立ではないんですが、昭和28年度から4年制の第二部を設置した神戸市外国語大学では、大学設置審議会の認可を得て「二部を希望する短期大学部学生を選考の上、それぞれ相当学年に編入して、初年度に第1、第2、第3学年を開設、翌29年度には第二部を完成させ勤労学生の要望にに応じている」といった事実があるのです。これは『大阪外国語大学70年史』（大阪外国語大学70年史編集委員会、1992年、P.139.以下『70年史』）に記述がありましたので、それをそのまま引用させていただきましたが、こうした事実を知りますと、短期大学部学生の要望への対処の方法が大学として適切であったのかどうかは、いまの段階ですけれども、考えさせられることだと思います。

このお話のご依頼をいただいて、いろいろと調べてみますと、こういうことであったのかと改めて教えられることがありますね。特にこの第二部への即時編入問題は、いままでは残念としか言いようがありませんが、もう少し柔軟に対応できていたことかもしれませんね。

## 紛争の時期

**中岡** 進藤先生、菅先生、少しお言葉を入れていただいたらどうでしょう、私ばかりしゃべっているようで……。

**進藤・菅** いえいえ、引き続きお願いします。

**中岡** 紛争の時期と言いましょうか、紛争前後の状況ですが、大学80余年の歴史のなかで最も衝撃的な事件は、昭和44年に起こった大規模な大学紛争であったと思います。全学封鎖、学外授業、学生間の暴力沙汰、機動隊の導入をめぐるの教授会の激論など、思い起こすと何かしら悲しい、そういう思い出しかありません。

後年、ある先生と、このときのお話をすることができました。先生は実際に角材を持って教授会に乱入してきた学生グループの前に立たれたのか、あるいは対立する学生グループのあいだに割って入られたのか、もうどちらか覚えていないとおっしゃっていましたが、



そのときのお話では、彼らが教員に向かって実際に殴りかかってきたことがあったようですが、そんなときでも、彼らは本当に殴ってはこなかったと、間一髪のところまで止めていたとおっしゃっていました。何かしら加減をしていたんだと、そんな気配が感じられたと言って、先生は莞爾としておられましたけれども、私はそのお話を聞いてほっとしましたね。おそらくそういう話は、ここだけではなく、いろんな大学であったんだろうと思います。

そのような時期、私はスペイン留学中に肝炎になって入院するはめになってしまったんです。あらためて『70年史』を読ませていただきますと、先生方がご苦労なされたときのことがいろいろと語られていまして、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまいます。本当に申し訳なかったと思っております。

それ以前から、学生運動は非常に激しかったと思います。学生自治会主導の政治的なテーマで学内討論会などが頻繁にあって、まだ私が学生のときだったと思うんですが、何が理由で学生自治会が全学投票の結果スト権確立とか何とか言いまして、大学に行きますと表門にバリケードがしてあって中に入れてもらえませんでした。

そんなことがなくても、昔の上本町の大学の表門は、電車通りに面しているのに、その建物の正面に自治会の立て看板ばかりが何枚も並んでいて、非常に汚らしい雰囲気でした。どなたかがおっしゃっていましたが、お嬢さんとお父さんが受験の願書を取りに来られて、そのお父さんが「これはだめだ、いけない」と言って、娘さんの手を引っぱって引き返されたとおっしゃっていましたね。ですから表はきれいにしておかないといけません、私はまだ若かったですけれども、お年を召した教授の先生がおっしゃっていました。私でも汚いなと思ったことが何度もありましたから、やはりきれいにしておくというのも大学としては大切ですね。

当時は日米安全保障条約の改定延長をめぐる国論が二分されて、大学でも授業時間を割いて、この問題をめぐって激論が交わされ、自治会の申し入れとして、先生の授業を20分くれとか30分くれとかいって、よく自治会の学生が来ていました、こういうテーマについて議論をするのだと言っていましたね。

あるとき、イスパニア語学科のお1人の先生の授業であったと思いますが、自治会の申し入れで授業時間の20分か30分を割いて討論がおこなわれるということになって、その先生に君も来いと言われたんですね。そうして行きましたら、自治会の学生の司会でいろいろと討論が進んでいって、もちろん大方の意見は日米安全保障条約の破棄を求める、そういう声が大きく上がっていました。

ただ私たちが入っていったときに、1人のイスパニア語学科の学生が立ち上がり、「私は今後とも日本はアメリカと協力してやっていくのがいいと思う」と、はっきりと彼自身の意見を述べたんですね。彼の声は多勢の反対意見を浴びて、押しつぶされそうになったと思います。実際にそんな感じでした。しかし、彼は絶対にその主張を曲げなかった、同級生のそういった反対の声に対して、断固その主張を曲げませんでした。

私自身は、その討論会の結末がどのようなようになったかは記憶にないんですが、そういった

袋だたきにも遭いそうな状況下で、臆せずに立ち上がって自説を堂々と発言した、私たちから5、6年下か、もっと下であったかもわかりませんが、そういうイスパニア語学科の1学生の勇気には、いまでも称賛のことばを送りたいと思っています。それが忘れられないですね。

これに関連しまして、自分自身に関して思い出すことがあります。当時はいくつかの語学科に自衛隊や郵政省からの聴講生が来ていました。自衛隊は違憲か合憲かの議論が非常に激しいときで、教授会でもはっきりと自衛隊が違憲だという立場に立って発言される方もあり、入学者決定のための教授会だったのでしょうか、そうした自衛隊からの聴講生を国立大学の1つである外大が受け入れるのはよろしくないのではないか、という意見が出ました。そして、それが採択されて、その年か翌年からか、おそらく郵政省からの人は何の関係もなかったのに、聴講生を一切受け入れないということに決まったと記憶しています。

私はこの措置が妥当であったかどうか、いまでも、まだ心のなかにわだかまりになって残っているんですね。自分自身に対してですが、ちょっと後味が悪いんです。自衛隊に入っているからというだけで意地悪をして、何人かの若者の学ぶ場を閉ざしてしまったのではないかと思います。酷なことをしたのではないかと、いまでも非常に後味が悪い思いがします。

そうすると、なぜそのときに立って自分の意見を堂々と発言しなかったかと、いまだ若輩の助手か講師だったと思うのですが、自分の思いを堂々と発言できなかった、そういった自分が、いまでも恥ずかしく情けないといった気持ちをまだ拭い去ることができません。ですから、先ほどのイスパニア語の後輩の勇気ある態度と、そのように発言する勇気がなかった自分とをいまでも比べてしまいます。そんなこともありました。

次ですが、紛争後も試練の日々はもちろん続いていました。この時期に特に授業時間割の編成の方法に修正が加えられていったと思います。記憶するところでは、次年度の開設科目や時間割がどのようになるかを11月ぐらいに知りたいという学生諸君からの要望があって、この要望は箕面のキャンパスになってからも続いていました。ですから、毎年カリキュラム担当の教員が、時間割委員の学生諸君と会をもって、必要な説明をして、それに対して学生諸君からの意見を聞いて、生かせるところはできる限り生かすといったかたちで、何年かは時間割が作成されていました。

この点については、第二部の学生諸君からの要望のほうが強くて、またある意味では切実でもあったのでしょね。何年かたつと、このような慣行も薄れていったのではないかと思います。特に第二部の時間割では、4月に入って授業が始まってから、初めて科目履修のうえで問題があるとわかる、ということもありました。よく考えたつもりでも2つ科目が同じ時間に重なっていて、どうしても両方の科目をその年に履修しなければいけないのにできないというようなことがあって、急遽、学科主任の許可を得て時間割の変更をしたようなこともありました。

そのように、自治会の学生諸君の建設的な態度には、われわれとしても応えられるかぎ

りは応えようという姿勢であったと思います。

もう1つ紛争との関係ですが、紛争が治まってから、教員と学生との親睦を図るということで、文部省からの補助金も出て、毎年新生を中心にバスで1泊旅行に出かけることになったと思います。調べてみたら、第1回目は昭和45年6月から7月にかけておこなわれていました。これは合宿研修とか、学科別懇談会とか言われていました。

現地での研修は、私が教員の1人として同行したときには、イスパニア語学科では外国人の先生のお話を聞いて、それで終わっていました。この真面目な話の後は、いわゆるコンパになっていて、それはそれでよかったと思います。それで親睦が図れて、楽しい一日が過ごせたとしたら、目的も十分に達成されたということになるんだろうと私は思っていました。

しかし、まだ自分の酒量がわからない学生が、男性も女性もなんですが、本当にアルコールをがぶがぶと飲んでしまうんですね。そして醜態をさらすということがありました。これには本当に困りました。困るだけでなく心配でしたね。一気飲みをしたり、酒を飲んだ後どこかの湖、中禅寺湖でしたかに入って亡くなった、若い命を失った関東の大学生のことも新聞に大きく報じられたと思います。このような事故はありませんでしたが、部屋で寝ていましたら、3階でディスコをしているのがイスパニア語学科の学生で、そのどんどんという振動が全館に響いて眠れないし、ほかのお客さんから苦情が出ているからやめさせてほしい、という連絡がありました。旅館の人に注意されても、ふんふん言いながらやめないんでしょうね。だから、どうしてもわれわれが行かないといけないということになりますが、そのときはすぐにやめてくれてよかったです。

ときには酔っぱらって、ふすまを突き破って次の間に倒れ込んで、これは旅館に弁償金を払ったと後で聞かされました。そんな武勇伝は、私が知っているかぎりでは、この2つぐらいでしたけれども、おそらくいろいろあったのではないかと思います。ですから、われわれとしては一晩中心配でおりましたが、大学全体として、私の知る限り、人命にかかわるような事故がなかったということで、それは本当によかったと思います。

実質、この企画は学園紛争に懲りた文部省からの要請で実施されていたわけですね。しかし、それはあまり表に出さずに、形式的には教授会の意向、あるいは語学科単位の希望によって、これも関係の方におたずねしたんですが、概算要求をしたうえで実施に移していたようです。だから、後には各語学科が独自に宿泊希望地を特定したり、日帰りの研修小旅行ですませたり、あるいは実施を取りやめた語学科も出てきていたと思います。

このように教授会、もしくは語学科の立てた計画に従って、学生課が中心になって世話をするというかたちで行事がおこなわれていたことを考えますと、私なんかはあまり真面目に考えずに、とにかく一緒に行くという軽い気持ちでいたわけですが、同行する教員の責任というか、あるいは管理能力というのは常に問われていた、ということなんじゃないかな。だから1つでも事故があったとしたら大問題になりますから、それを考えますと、大過なく終わったのは本当によかったですね。

一方、この企画を実施するために、いろいろとお世話いただいた担当事務の方々のご苦

労も、やはり忘れてはいけないうらうと思ひます。当時、学生部長でおられたのか、もう学長でおられたのではないかと私は思うのですが、山田先生と、何かのときにこの合宿研修の様子についてお話をしてひいて、私がかこの小旅行のことを、先ほど申しましたことも含めて否定的にお話ししたことがありました。

そうしますと山田先生が、「君、あんまりそちらの面ばかりを強調すると、先生方以上に苦勞している事務の人もあるし、世話してくれている学生課担当の人々もあるんだ、そうした係の人たちに悪いから、あまりマイナス面ばかりを強調したらいかん」と、やんわりと注意を受けたことがあります。ああそうだそうだったのだ、と思っただこともよく覚えてひいます。

そういうこともありましたか、私はこの行事はもっと早く終わったのかと思っただいたら、1992年の『70年史』が完成して発行された年でも、まだ続いているんですね。

**進藤** 私も経験があります。

**中岡** そうですか。

**進藤** 私は1997年にこちらにまいりましたけれども、その最初の年は引率で行っております。その当時は「語科合宿」とか「語科研修」という言い方をしておりましたが、やはり学生が大騒ぎをして、ホテルの人ににらまれたのをよく覚えてひいます。

**中岡** そうですか。皆さん楽しく行って、ご飯をおいしく食べて、また楽しく帰ってくるということであれば一番いいんですけどね。

**進藤** そうですね。

**中岡** 研修とか何かというのをあまり固苦しく考えないで、楽しく1日を過ごす、というようなことでよかつたのではないかと思ひますんですけどね。

**進藤** はい。

**中岡** そして、先ほどもお話しした非常勤のドミニコ会司祭のドミンゴ先生ですが、先生は普段は教会においでになるわけで、ちょっとばかりこういう旅行はめずらしく楽しいいんでしょうね。この旅行には第一部に必ず同行されて、楽しそうにしておられました。外国人の先生方は皆さん楽しそうにしておいででしたね。

**進藤** そうですね。

**中岡** いつでしたか、城崎で外国人の先生方が楽しそうに有名な温泉風呂へ入っておられましたよ。ドミンゴ先生も同じことで、食事ときには浴衣に着替えられて、床柱を背にあぐらを組まれて、たくあんをばりばり、お茶漬けをさらさらと、まったくリラックスされておられた姿が目には浮かんできます。そんなことも1つの楽しい思い出ですね。(続)

### 中岡省治名誉教授略歴

1936年8月 生まれる

1955年3月 市立伊丹高等学校卒業

1959年3月 大阪外国語大学外国語学部イスペイン語学科卒業

- 1959年4月 大阪外国語大学短期大学部助手  
1959年7月 大阪外国語大学助手に併任（1961年3月まで）  
1965年4月 大阪外国語大学（夜間）助手に併任（1966年3月まで）  
9月 大阪外国語大学短期大学部講師に昇任  
1966年4月 大阪外国語大学講師に転任  
大阪外国語大学外国語学部（第二部）講師に併任（1966年9月まで）  
大阪外国語大学短期大学部講師に併任（1967年3月まで）  
1969年2月 大阪外国語大学助教授に昇任  
1972年6月 大阪外国語大学助教授外国語学部配置換え  
1974年4月 大阪外国語大学大学院外国語学研究科担当  
1978年1月 大阪外国語大学教授外国語学部昇任  
2002年3月 大阪外国語大学定年退職  
現在 大阪外国語大学名誉教授

(2009. 12. 24 受理)